

Infinity Vol.21

～大学と地域の協働力は無限大∞～

2026.02.10 発行

発行元
龍谷大学 社会学部
社会共生実習サポートデスク

〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学社会学部階級5号
社会共生実習サポートデスク
TEL:075-585-7672
FAX:075-585-6377
E-mail:co-ex@ad.ryukoku.ac.jp

今年度の活動紹介

①地域エンパワねっと・大津中央

担当教員：脇田 健一 教授

滋賀県大津市の中心市街地では「商店街を訪れる親子連れが少ない」、「大きなイベントの時は人が集まるが、日常的ににぎわいを維持するのが難しい」といった課題があることを知り、12/13(土)と1/17(土)に、ナカマチ商店街のレンタルスペース「ナカマチスタジオ」で、絵本を自由に手に取って読める温かな空間「ナカマチのひみつきち」を提供しました。いずれも小さなお子様連れの親御さんが多数ご来場くださり、大盛況でした。この活動を企画発案した受講生は、「私の地元は田舎だったので親族以外の大人や子どもたちと関わる機会が多くてそれが当たり前だと思っていたのですが、この実習をとおしてそれが当たり前ではない地域もあるということを知りました。それは寂しいことだと感じたので、そういった子どもさんたちにも地域の温かさに触れてもらえる機会を提供できればと思います活動してきました。」と語ってくれました。



③お寺の可能性を引き出そう！

—社会におけるお寺の役割を考える—

担当教員：猪瀬 優理 教授
古荘 匡義 准教授

11/15(土)、11/16(日)に、浄土宗 大本山 清浄華院で開催された社会活動「LOTUS WEEKEND 2025 いのち・しあわせ・平和—未来へのメッセージ—」の一角を借りて、防災ワークショップを実施しました。今回の防災ワークショップでは、災害時にガラスの破片などから足を保護する新聞紙スリッパづくり、がれきに埋もれて声が届かない時に自分の位置を救助者に知らせることができるホイッスルを自分で自由に装飾するワークを提供しました。ワークショップブースに来場された方々には、「新聞紙スリッパは意外と簡単に作れた」、「かわいいホイッスルができた」と、楽しんでいただけました。来場者同士でお話される場面も多々あり、今回の企画に際して受講生たちが思い描いていた、「人と人がつながる場づくり」ができていたように感じました。



②農福連携で地域をつなぐ—

「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員：坂本 清彦 准教授

12/12(金)に、滋賀県栗東市のNPO法人「縁活」が展開する農福連携事業「おもや」の利用者さんとスタッフの方を龍谷大学深草キャンパスにお招きして、交流会を開催しました。実習では日頃、受講生たちが「おもや」の農作業をお手伝いしたり利用者さんと交流したりして農福連携の実際を体感していますが、「おもや」の利用者さんの中には「大学とはどういう場所なのか?」、「大学生という人はそもそもどういう人なのか?」といった疑問をお持ちの方もいらっしゃいます。この交流会では、そういった疑問を解消してもらおう狙いもありました。「大学」の敷地に足を踏み入れることが初めての利用者さんもおられて、キャンパスの広大さや、コンビニやスターバックスコーヒー、ATMが入っていること、斬新な形の学舎や居心地の良い空間にも驚かれました。昼食は深草キャンパス内で「社会福祉法人 向陵会」が経営している障がい者就労継続支援B型事業所の「café樹林」で摂り、交流を深めました。その他にも社会学部の学生が集うワークルームで障がい者による自然栽培の農業を全国へ広げていく活動をしている自然栽培パーティーの動画鑑賞をしたり、オンライン授業の雰囲気も味わってもらったりと、「大学」を満喫してもらいました。



④障がいがある子どもたちの放課後支援

担当教員：土田 美世子 教授

7/5(土)に、実習受け入れ先である「放課後等デイサービスゆにこ神領・ゆにこ神領重心」(以下、ゆにこ)にて、受講生たちが利用者さんと今まで関わった経験を活かして考案した設定プログラムの「スライム作り」をおこないました。利用者さんはスライムが出来上がると、手で感触を楽しんだり、「〇〇先生見てー!」と伸ばして見せたり、とても嬉しそうにしてくれていました。その後、メインイベントとして、たらいいっぱいのおスライムを作りました。固まり出すと「おぉ〜!」という歓声や「混ぜた〜い!」といった声上がり、完成したものを思う存分混ぜてもらいました。今回の設定プログラムは、利用者さんたちが終始集中して参加出来ていたのでも盛況だったように思います。一方で、ゆにこのスタッフの方々が利用者さんへのさまざまな呼びかけや、的確かつ迅速な対応でフォローしてくださいました。誠にありがとうございました。



⑤コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト

担当教員：久保 和久 教授

実習先である滋賀県レクリエーション協会が6/22(日)にマンカラ講習会が主催され、受講生らも参加しました。マンカラとは、アフリカを始め、ヨーロッパ、東南アジア、カリブ海諸国など世界中でプレイされているボードゲームです。講習会にはレクリエーションに興味のある方々が参加され、マンカラの遊び方の説明から始まり、実際にトーナメント戦もおこなわれ、小学1年生からご年配の方までが一体となって楽しみました。同協会では会員の年齢層が高齢化ってきていることと、講習会の参加者が集まらないことが課題であると認識されていて、参加した受講生らは広報活動の一環として、SNSでの発信用にスマートフォンで講習会の様子を撮影しました。



活動報告会の発表内容



① 脇田PJ（地域エンパワねっと・大津中央）

本プロジェクトは、滋賀県大津市中央学区を中心にまちづくりに取り組むプロジェクトです。地域の方と関わらせていただく中で、学生自身が地域の課題に気づき、その課題を解決する手段を考えることを目的としています。

今年度は6月に実施した「まちあるき」をきっかけに、地域への活動が動き出しました。実際に地域を歩いてみると、道行く人が少ないことや商店街にあまり人が通っていないことに気づきました。そこから、多世代が自然に交流して商店街がもっと親しみのある場所になるといいのではないかと考えるようになりました。交流の現状を見ていく中で、シニア世代は自治会や回覧板など、既存の仕組みによってある程度交流が成り立っている一方で、最近建ったマンションなどに住む若者世代（特に子育て世代）は地域と関わる機会が少ないという課題があるのではないかと感じました。そこで、多世代交流を目指すために、まず、子連れの方を対象に、気軽に立ち寄れる場を作ろうと考え、ナカマチ商店街にあるナカマチスタジオをお借りして絵本や紙芝居の読み聞かせをおこなうイベントを実施しました。

第1回は12月に実施し、イベントに参加くださった親御さんからは「まちを出歩くきっかけになった」、「ぜひもっと開催してほしい」とのお声をいただきました。この取り組みを通じて、地域に出るきっかけを求めている人は実際にいることがわかりました。一方で、当日は家族ごとにご一緒する場面が多く、参加者同士の交流が生まれなかったと感じています。そのため、1月と2月に開催する際はこのイベントが交流の場となることを目指して参加者同士の会話や関わりが生まれるような工夫をしていきたいと考えています。

プロジェクトを通して、地域と関わるきっかけは特別なものではなくても良いのではないかと考えるようになりました。これからも商店街や地域の方々と向き合いながら小さなきっかけを積み重ねていけたらいいなと思います。



② 坂本PJ（農福連携で地域をつなぐー「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」）

本プロジェクトの活動中に見出された社会課題は、障がいの特性を十分に理解したうえで関係を構築することの難しさです。日常的なやり取りの中で何気ない言動が相手にどのように受け取られるのかを常に考えて会話をしました。また、特性への理解が不十分なまま関わるとコミュニケーションが円滑に上手くいかないことがあり、これも課題の一つでした。

この課題を解決するために、私たちは農作業時間だけではなく休憩時間も大切な関わりのお機曾になると考えて、利用者さんとのコミュニケーションを継続的におこないました。日常的な会話や何気ない一言を通して一人ひとりの性格や興味関心、障がいの特性を理解することを意識しました。また、利用者さんの機嫌や行動に関して一方的に問い詰めるのではなく、その背景にある特性や気持ちを考えながら関わるように努めました。さらに、相手の反応を観察しつつ、言葉選びや声のかけ方、距離感を調整することで安心して関われる関係づくりを目指しました。こうした関わりを作り出すことで利用者さんが自分の想いを表現しやすい環境づくりにつながるよう意識しました。

実習当初は利用者さんから受講生の着ていた作業着に対して「その服変だね」などと一方的な発言が見受けられたのですが、実習の半ば・後半になってくると、受講生に対して「お化粧してほしい」「髪の毛伸びたね」など、相手を意識した言葉をかけてくれるようになりました。継続的な関わりを通じて信頼関係を構築できた証ではないかと思えます。本実習を通して利用者さんに限らず各々人の特性を理解しその人に合わせた関係性を築くことが大事だと学びました。この考えが社会全体の常識になるように、多くの方々に伝えていくことが課題だと思っています。



③ 猪瀬・古荘PJ（お寺の可能性を引き出そう！ー社会におけるお寺の役割を考えるー）

お寺と聞くと宗教施設のイメージが強く、無意識のうちに見えない壁を作ってしまう。葬式仏教と揶揄されるお寺ですが、本プロジェクトでは地域に開かれた活動をおこなうお寺を実際に訪問し、活動の意図を明らかにするとともに、お寺で企画を実施しながらお寺の可能性を模索しました。

前期には、西方寺（滋賀県草津市）・一念寺（京都市）・西本願寺（京都市）に伺い、スタッフとしてイベントに参加したり、ご住職から社会貢献活動に込めた想いを聞かせてもらったりしました。なかでも「西方寺花地蔵まつり」は音楽会やフリーマーケット、駄菓子屋などが開かれ、小学生や家族連れを中心に多くの人でにぎわっており、お寺が新しいご縁を生み出す場であることを実感しました。後期には、清浄華院（京都市）で開催されたLOTUS WEEKEND 2025において、防災ワークショップを企画し、実施しました。ホイッスルのデコレーションや新聞スリッパの製作を通して防災意識を持ってもらうだけでなく、私たち受講生と来場者、あるいは来場者同士の素敵な出会いにつながればという想いを込めました。

活動全体を通じた反省点は、活動の状況や成果を発信するためのSNSの更新頻度が低かったことです。加えて、実習先のお寺に関する事前調査に粗さがあり、世に公開されている情報以上の内容を聞き出せなかったことも反省すべき点でした。一方で、活動の振り返りを兼ねたnote記事の執筆をととして、それぞれのお寺が目指す理想像やイベントに込められた想いを整理することができました。



④ 土田PJ（障がいがある子どもたちの放課後支援）

このプロジェクトでは、障がいのある子どもたちと一緒に過ごすことで、その個性を理解しました。その上で、障がいのある子どもたちを包み込むことのできる「共生社会」の実現を考えました。

実習活動としては、基本的に週1回、決まった曜日に放課後の時間を障がいのある子どもたちと過ごすことが中心でした。子どもたちとともに遊び、コミュニケーションを取ることで、デイサービスの職員の指導を受けながら、それぞれの「個性」である障がいの特性についても理解するよう努めました。実習のまとめとして、その理解に基づき、実習生全員で土曜日の「設定実習」を実施しました。用意した「スライム」を子どもたちは喜んでくれましたが、当日は想定していなかったことも起こり、事前の準備の大切さや放課後等デイサービスの役割についても学ぶことができました。

障がいのある子どもとも関わる際に、なんとなく感じていた不安を取り除けたことは、大きな財産となりましたが、現時点では彼らとの「共生社会の実現」は考察だけで終わっています。今後、今回の経験をそれぞれの場所で活かし、周囲に語ることで子どもたちへの理解を促し、障がいのある子どもたちにとって過ごしやすい社会の実現に貢献していきたいです。



⑤ 久保PJ（コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト）

本プロジェクトの「レク」とはレクリエーションの略で、仕事や学業などで疲れたときに、肉体的・精神的安定が求められる際にレクリエーションをおこなうことで心身の健康維持や社会的なつながりを得るなどの効果があります。社会的課題としては、レクリエーションの知名度がそもそも低いということと高齢化が進んでいることが挙げられます。

主な活動としては、滋賀県レクリエーション協会の広報媒体の運営です。X、Instagram、Facebookの3つのSNSを運営しています。投稿の内容は滋賀県レクリエーション協会が主催するイベントの告知はもちろん、毎回の授業で取り組んでいるレクリエーションの紹介などもおこなっていました。他の活動として、滋賀県レクリエーション協会の運営指導部会への参加や地域イベントへの参加、全国レクリエーション大会にも参加しました。

実習活動の成果は、SNSでハッシュタグを多用することによって今までよりも「いいね！」や閲覧数が増えたことです。また、イベントに参加することで、まずは自分たちがレクリエーションを知ることができ、興味が湧いてきて、もっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。今後の課題としては、SNSの投稿数がまちまちだったので、もっと投稿を増やして知名度を上げていきたいと思っています。

